

時代は闘論(ディベート)から対話(ダイアローグ)へ 「無意識と対話する方法」を書いて みなに伝えたかったこと

叡啓大学ソーシャルシステムデザイン学部学部長・教授
慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特別招聘教授
保井俊之

2022年1月19日

(注) 本稿の意見にわたる部分は筆者の属した、または属する組織の見解を表すものではなく、私見である。

2017年にこの本を共著で出版しました：
どうして出版したかったのか、今日お話しします



(2016年8月 米国アリゾナ州セドナにて、筆者撮影)

- 本の進行そのものが対話(ダイアログ)
- 対話の相手は、日本の幸福学の第一人者、前野隆司慶應大学大学院SDM教授

前野隆司・保井俊之(2017)『無意識と「対話」する方法: あなたと世界の難問を解決に導く「ダイアログ」のすごい力』ワニプラス

「二度目の人生」への転機: わたしの人生 は2001年9月11日に一度終わった



崩壊したニューヨークのワールドトレードセンターで増援を求めるニューヨーク消防局の消防士

(写真出所)ウィキペディアhttp://commons.wikimedia.org/wiki/File:WTC-Fireman_requests_10_more_colleagesa.jpg

だから「二度目の人生」では、たとえ出世しなくとも、おカネにならなくとも、社会を前向きに変えるための対話を進めて行きたいと思っています。

2001～2015年：
「世の中を前向きに変える」(社会イノベーション)に真正面から向き合うことで、私の人生は劇的に変わり始めた

イノベーション教育に身を投じて

- 2008年に開設された慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科(慶應SDM)に教員としては参じた。
- システム×デザイン思考でイノベーションを起こす方法論の教科書を共同執筆で、2014年に出版した。
- 評判は良かった。数百人を超える学生たちに二十を超える技法を伝授した。毎日が楽しかった。院生たちは本当に優秀で、伝授した技法をバリバリと使いこなせるようになり、優秀な成績を手にして職場に戻っていった。



(書影出所)amazon.co.jp

前野隆司(編著), 保井俊之, 白坂成功, 富田欣和, 石橋金徳, 岩田徹, 八木田寛之(著)(2014)『システム×デザイン思考で世界を変える: 慶應SDM「イノベーションの作り方」』日経BP社

私に転機が再び訪れた

それから数年が経って…



しかし、日本社会にイノベーションによる変革の波は起こらなかった。たくさんイノベーションの方法論を教えたのに。深い疑問の淵にわたしの心は沈んだ。(保井俊之 2021)

小布施の対話会で気づいたこと: 足りなかったのは心の変容だった

- 2015年の秋、長野県小布施町の古民家へ行き、円座の対話会に初めて参加。
- 対話を円座で三日間続けていくと、参加者に、「じぶんごと」として何かをしたい意欲が湧いてくる。
- そこにイノベーションの技法を教えると、社会起業のアイデアが湧き、実際にどんどん起業していく。(中村一浩ら 2017)



(写真出所: 2016年5月 長野県小布施町にて、筆者撮影)

- これまでのイノベーション創出の取り組みと何が違ったのか。
- イノベーション理論で「諭す」前に、対話で相手の心を開き、「やりたい」という心の変容に火をつけたからだ。(保井俊之 2021)

対話とは

(Bohm 1996, Isaacs 1999, Kahane 2010)

- みなで力を合わせ、自分が変わるための一歩を踏み出すこと
- 分析したり、議論に勝ったり、意見を交換するのではない
- 自分の意見をひとまず棚に上げ、さまざまな意見を見つめる
 - みな意見を聞き、それらをいったん保留し、何を意味するの
か見てみること。
- 対話: 自分の心の中の問いを、対話への参加者とともに一緒に探求すること
 - 誰かにしてあげるのではなく、誰かとともに行うこと
 - 「相手はこういうヤツなのだ」という事前の思い込みを解く
 - 相手の言っていることを判断することを棚に上げ、保留する
 - パワフル・クエスチョンを立て、答えを自分で探求すること
 - パワフル・クエスチョン: コーチングの用語。一生涯かけても探求していきたい問い(Vogt et al. 2003, Kimsey-House et al. 2011, ボブ・スティルガー 2015)

ざっくりとまとめると: 対話とは

- 他人と意見交換することではない
- 他者や自分の心の中でやりとりされる言葉を、自分自身に反響させること
- そして、わたしたちの記憶の古層、すなわち無意識に眠る知恵から、気づきを得る行動

本書を書くきっかけとなった問題意識: 無意識との対話で「左脳」と「右脳」のバランスをとれないか

- 脳の働き: 意識と無意識の二つ。無意識は意識できないが、実は膨大。
 - 無意識とは: 「意識できないこと」「無意識にやっていること」全般を無意識と呼ぶ。「意識できない脳の処理」を「無意識的な処理」と捉える
- 無意識: 創造性の発揮に必要なのではないか?
 - 日常生活で、会社や学校で論理的に説明することに全身全霊を使い、SNSやメールで週7日間24時間絶え間なく合理的な判断を迫られている。このような生活では心の中の半分が忘れられている。
 - 論理では割り切れない気持ち、感性、並びに何となくのもやもやなどの心の作用。それらの心の部分は本当は社会や個人の人生ではとても大切な、クリエイティブな部分

最高の対話とは



- 最高の対話
 - 無意識(自分の心の深層)で内省し、歴史の古層とつながり、新しい気づきが浮かび上がること
 - 他者とのご縁を「無縁社会」の中でもやい直していく
 - まわりの人たちとの対話だけでなく、自分の心との内省としての対話、さらには家族やコミュニティ、地域の文化や風土へのつながりを探求する対話

(写真出所)<https://en.wikipedia.org/wiki/Campfire>

第1章: ダイアローグのルーツ

- 対話(ダイアローグ)が世界の注目を集めている。
 - 議論・討論とは違う
 - 近代合理主義、要素還元主義、進歩主義的世界観では解決できない問題に対処する方法
 - ダイアローグ理論のルーツはベトナム反戦運動時のカウンターカルチャー。
- 対話の中に息づく「歴史の古層」
 - 新しい文明・文化に、一見「負けた」ように見える論理や古い文化も完全に消滅することはなく、「感じ」「懐かしさ」として文化の古層に生き続けている。
- 世界各地の文化・文明の「古層」
 - 意見・正義・文化の衝突を防ぐための知恵(ネイティブ・アメリカンのトーキングスティック、車座で語り合う文化など)が数多く埋まっている。
 - ダイアローグの有効性を無意識で感じとる機会

第2章: ダイアログとはなにか

- 対話理論の大先達たち: ウィリアム・アイザックス、オットー・シャーマーは経営学、マーガレット・ウィートリーはジェンダー論、アダム・カヘンは紛争解決マネジメントの新しい手法として、ダイアログを取り入れた。
- ダイアログの四機能 (ウィリアム・アイザックス): 「聞く」「大事にする」「保留する」「出す」
- 議論でも意見交換でもない 2つの対話のカタチ (ウィリアム・アイザックス)。
 - リフレクティブ (内省的)・ダイアログ: 主張や論理を離れ、自分自身の無意識と対話
 - ジェネレーティブ (生成的)・ダイアログ: 参加者全員が個人としての思考を離れ、ジャズの即興演奏のように協創する対話

対話で、心の中のモヤモヤが未来への形になる

(Isaacs 1999:29-36, 31図を筆者が一部修正)

見えないものが形になる

(Architecture of the invisible)



直感から来る兆し

(Predictive Intuition)



新しいふるまいへの力

(Capacity for New Behavior)

対話の
四機能

聞く

(Listening)

大事に
する

(Respecting)

保留する

(Suspending)

声に出す

(Voicing)

第3章: 日本はもともとダイアローグ的な国だった

- 従来の論理で説明しきれない曖昧なモノをとらえようとする「古層の論理」に、日本人は馴染んでいる
 - 多様な論理の共存を可能にするダイアローグ的な知恵: 「はっきり主張しない」「白黒つけずに保留する」
- 古層の表層への露出: アメリカ西海岸でダイアローグが生まれる以前から、日本には文化のクロスロードとして、多様な文化の衝突、選択的受容を繰り返してきた歴史がある
 - 政治的ロジックの変化、Political Correctnessへの違和感が強まっている欧米: 日本のようなダイアローグ的世界の入口に立っている?

自己認知としての対話: 多声性

- Bakhtinの対話性(dialogism)理論(日本認知学会 2002:518, 525)



Mikhail Bakhtin
(1895-1975)

- 対話的関係にあること: 自己の存在・認知が可能であるためには、自らとは異なる他者が必要
- 多声性(ポリフォニー): 複数の対話が並行進行
 - どのような発語の意味も個人に完全に還元できない。
- 対話:他者性が生の基盤であり、すでに存在しているものといまだ存在していないもの、すなわち自分と他者との絶えざる交換(クラークら 1990:91)

知的創造を対話で行う日本の伝統から、 新しい価値づくりへ

- 知的創造: 日本では伝統的に、個人ひとりの力量(アルテ)でなされるものではなく、人と人との間での対話でなされるとの認識
 - 和辻哲郎の「人間(じんかん)」
 - 漫才など演者二人以上の話芸を、速記録の形で書物にして読むという伝統
 - 菊池寛創刊の『文藝春秋』が火を点けた対談記事、対談本の
大正・昭和戦前期ブーム
- 対話によってイノベーションは生まれる
 - 対話によって相手と新たな価値を協創
 - 自らの主張を相手がどう考えるのかにはお構いなく押し通すのではなく、別のコミュニケーションの方法がある「はず」
 - 前提: 自分自身との内省的対話によって、社会的大義(コース)や人生の目標(アジェンダ)がくみ上げられている
 - 利他的でフラットな関係性を対話の相手との間に作り出し、それを基盤に新しい価値を創造

第4章: ダイアログで日本を変える人々

- 日本におけるダイアログの原点: フューチャーセンター運動 (スウェーデン発) と ワールド・カフェ運動 (アメリカ発)
 - ホワイトボードをつかったブレイン・ストーミング、ワークショップなどの対話法はここから広がった。
- ダイアログを用いた地域イノベーション: 日本の代表例
 - 野村恭彦さん: フューチャーセッション
 - 西村勇哉さん: ミラツク
 - 井上英之さん: マイプロジェクト
 - 加藤せい子さん: TS4 みちくさ小道、一人一品運動
 - 坂倉杏介先生: 三田の家、芝の家
 - 中村一浩さん: 小布施インキュベーションキャンプ、小布施イノベーションスクール
 - 三田愛さん: コクリ！プロジェクト
 - 山崎亮さん: studio-L
 - 山田博さん(と中村一浩さん): 森のリトリート

【対話のリーダーの特長】

- 意識のレベルでロジカルにイノベーションの方法論を学ぶ。
- 無意識のレベルで自分が作り出したいことに向き合い、心持ちを前向きに感じる。
- 「いまを変えたい」と声にとりあえず出してみることを恐れない。
- つながり上手。他者やコミュニティでのオープンかつフラットで温かい関係性の構築に長けている。
- 地域や友人とつながっているから、自分自身の幸福度もとても高い。

第5章: ダイアローグがつくる幸福な未来

- 進歩主義的歴史観(歴史は必ず進歩する)に囚われずに未来を考え、つくることが大事
- ダイアローグを通じて無意識にアプローチすること
 - 「古層と表層を行き来する窓」をつくること
 - 従来論理では表現できなかったモノコト(美や感情など)を論じることができる
- アメリカで体系化されたダイアローグは、日本向けにアレンジしていく必要がある。
- ウェルビーイング(心豊か)な生き方、働き方を追求していくうえで、ダイアローグは非常に有効である。
 - 現在の社会(表層)を幸せにすることは、未来の古層を豊かにすることでもある。

われわれが「じぶんごと」として無意識と
の対話から創りたい

ひらめき、問題解決、社会イノベーション、
協創とウェルビーイング(幸福)

参考文献

- Bohm, D. (1996) *On Dialogue*, London: Routledge (和訳: デヴィッド・ボーム著, 金井真弓 訳 (2007) 『ダイアローグ: 対立から共生へ、議論から対話へ』 英治出版)
- Isaacs, W. (1999) *Dialogue: The Art of Thinking Together*, New York: Crown Business
- Kahene, A (2010) *Power and Love: A Theory and Practice of Social Change*, San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc. (邦訳: アダム・カヘン著, 由佐美加子監訳, 東出顕子訳(2010)『未来を変えるためにほんとうに必要なこと: 最善の道を見出す技術』英治出版)
- Kimsey-House, H., Kimsey-House, K., Sandahl, P. (2011) *Co-Active Coaching: Changing Business, Transforming Lives*, Third Edition, Boston, MI: Nicholas Brealey Publishing (和訳: ヘンリー・キムジーハウス, キャレン・キムジーハウス, フィル・サンダール著, CTIジャパン訳 (2012) 『コーチング・バイブル』第三版 東洋経済新報社)
- Vogt, E.E., Brown, J., Isaacs, D. (2003) *The Art of Powerful Questions: Catalyzing insight, innovation, and action*, Mill Valley, CA: Whole Systems Associates,
- カテリーナ・クラーク, マイケル・ホルクイスト 共著, 川端香男里, 鈴木晶(共訳)(1990)『ミハイール・バフチーンの世界』せりか書房
- ボブ・スティルガー (2015) 野村恭彦監訳, 豊島瑞穂訳『未来が見えなくなったとき、僕たちは何を語ればよいのだろう: 震災後日本の「コミュニティ再生」への挑戦』英治出版
- 中村一浩, 保井俊之, 菊野陽子, 林亮太郎, 前野隆司「対話(ダイアローグ)とデザイン思考を用いた人材育成・コミュニティ形成・事業創造: OIC (Obuse Incubation Camp) /OIS (Obuse Innovation school) の試み」『地域活性研究』Vol.8, pp.11-19
- 日本認知科学学会(編)(2002)『認知科学辞典』共立出版
- 前野隆司(編著), 保井俊之, 白坂成功, 富田欣和, 石橋金徳, 岩田徹, 八木田寛之(著)(2014)『システム×デザイン思考で世界を変える: 慶應SDM「イノベーションのつくり方」』日経BP社
- 前野隆司・保井俊之(2017)『無意識と「対話」する方法: あなたと世界の難問を解決に導く「ダイアローグ」のすごい力』ワニプラス
- 保井俊之(2021)「金融庁はなぜ「対話」したいのか」Policyウォッチ, 2021年5月13日, Nikkei Financial, <https://financial.nikkei.com/article/DGXZQODF2518N0V20C21A2000000?s=1> (最終閲覧2021年11月5日)